

ECO News

Educational Computing Newsletter

No. **84**
2003. 3

発行 = 21世紀教育研究所
所長 中山和彦

〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-3-6
TEL 029-850-3321 / FAX 029-850-3330
E-mail econews@eri21.or.jp
URL <http://www.eri21.or.jp>

確かな手応え インタラクティブ・スタディー「時計の読み方」から「教師のための著作権入門」まで—	東原義訓	1
連載第二回「この人」 更埴市立植生小学校校長 宮原一夫先生		2
いよいよ始まったインタラクティブ・スタディ教材による授業実践	中山和彦	3
インタラクティブ・スタディ教材作成奮闘記	長野県更埴市立植生小学校 堀越則夫	4
コンピュータで学校を変える! ? ~ Oからのスタート、そして研究発表校まで~	練馬区立田柄第二小学校 日下部弘之	7
ECONEws 郵送会員休止のお知らせ		8

確かな手応え インタラクティブ・スタディ —「時計の読み方」から「教師のための著作権入門」まで—

東原 義訓

岩手県の中川久美子先生が開発された「時計の読み方」が、装いを新たにWEB上で稼動し始め、長野市内の22の小学校の49学級の児童が、平成14年度の3学期にこのコースに取り組みました。事後のペーパーテストでは、39人学級の35人までが100点満点であったことなどが市内の研究会で発表され、注目をあびました。インタラクティブ・スタディは、児童の学力向上のために有効な手段であることが、実際の体験によって先生方に理解され、あわせて「コンピュータで指導できる教員100%」を目指す長野市にとって、強力な武器になることが実感されたようです。

今回の長野市の試みは、「長野市教育の情報化推進共同研究会」の普及推進小学校グループの活動の一環として、信州大学教育学部附属教育実践総合センターとの共同研究として実施されたもので、長野市のイントラネット内のサーバ上に構築されたインタラクティブ・スタディサーバに、市内の小学校に設置された児童用コンピュータからアクセスする方式がとられました。学校単位にサーバを設置する方式ではなく、地域の情報センター内のサーバ上に「スタディサーバ」をインストールして利用することの新たなメリットと課題が実感できました。どの学校のどのクラスがすでに学習を終えたのか、まだ実施していない学級はどこかなどの情報が、手に取るように各学校の係の先生に把握可能であったことは、地域全体のコンピュータ活用の普及推進への刺激となりました。また、個人・学級単位

の成績の集中管理が可能なことは、個人情報の扱い方や、それに対応するシステムの機能などの充実が急務であることなどの示唆を得ることもなりました。

東京都の五十嵐俊子先生を中心とするメンバーにより新規に開発された「教師のための著作権入門」コースは、平成14年度の3学期に、多くの現職教員の方に利用されました。全国の教育系大学院で学ぶ現職教員を主な対象とする通信衛星を活用した遠隔教育である「SCS教育工学特講II」の受講者、信州大学大学院教育学研究科の「教材開発特論」の受講者、長野県西春近北小学校の先生、沖縄県IT教育センターのIT教育課長期研修員、筑波大学および信州大学への内地留学OB、などの先生方です。

とくに、東京都教職員研修センターのある講座では、現職教員のための本格的e-Learning講座として、約20日間で100名の先生方が、勤務校や自宅から昼夜、平日休日を問わず、「著作権」についての研修をインタラクティブ・スタディによって実施されました。コースに設定された掲示板には、受講者から校内研修でもこのコースをやってみようといった複数の声が寄せられるなど、期待以上の反響でした。地域版のスタディサーバの運用のノウハウが蓄積できた試行でもありました。

平成15年度は、スタディサーバの機能をさらに充実・発展させます。ログインIDを入力すると、あなた専用の個人ページが出迎えてくれるようになります。

(信州大学教育学部教授) 1

■連載

第二回

「この人」

宮原一夫先生

(長野県更埴市立埴生小学校 校長)

更埴市大池自然の家で開催されていたスタディ研修会や信州大学公開講座に参加された先生は、プロ仕様の大きなビデオカメラを担いで研修会風景を撮影している人がいたことを憶えていらっしゃると思います。そして、「研修会の取材に来ている地元テレビ局の人かな」と思ったその人が、今度は夕食のバーベキューの準備を指揮しているので、「おや?」と思われたかもしれません。その“人”が宮原一夫先生です。

移動CAI教室、真夜中まで続く研修会、無線LANによる校内情報ネットワークの構築、スタディノートを活用したペーパーレス職員会、学校図書室におけるコンピュータ利用など、長野県の新聞を常に賑わしてこられた、長野県更埴市立埴生小学校校長をこの3月にご退職の、宮原一夫先生をご紹介します。

【宮原先生とスタディシリーズとの出会い】

宮原先生は、早くからコンピュータの学習指導の道具としての有効性に注目されていました。1985年に専門主事をされていた長野県教育センターで始まったコンピュータ講座の中心にスタディシリーズの前身である「クラスルームCAI研修」を据え、さらに、1988年には更埴市立東小学校で、筑波大学学術処理センターの中山和彦先生が主催していた「移動CAI教室」の実施に尽力されました。そして、これが大きなきっかけの一つとなり、長野県内でスタディシリーズが広く活用されるようになりました。



【宮原先生とCAI】

宮原先生は、コンピュータ導入当初から、一貫してCAIの重

要性を説いていらっしゃいます。先生は、更埴市立埴生小学校の学習指導研究発表会の紀要に次のような文章を載せていらっしゃいます。

平成元年からコンピュータ20台とネットワークの導入が(更埴市立)東小学校から始まった。学習ソフトは筑波大学から提供を受けた。当時、販売台数の多かったメーカーではなく、CAIソフトが動くメーカーを選定したことが「何故〇〇でないのか」と話題になった。

コンピュータ導入の目的を、「コンピュータの諸機能を学習の道具として活かし、授業改善をする」と理解してくれる者は少なかった。コンピュータの特性「表示・記憶(記録)・集積(1ヶ所に)・伝達配布・計算処理等々」を活かして学習を行うことで、個に応じた学習指導が可能になる。黒板中心の一斉学習では見えない一人一人の到達の様子などの実態がリアルタイムでつかめ、その場での指導ができる。

コンピュータがネットワークで使われることがまだ珍しい頃だったが、導入した「クラスルームCAI」は、先生用コンピュータから教材ソフトが子供用コンピュータに送られ、個々の子どもの学習履歴が先生用のコンピュータに集まるシステムであった。これを使うことで、学習の個別化がはかられ、学習履歴から子どもの実態・理解のようす(どこまで分かり・どこで躓いているか)を把握し、それに応じて個別指導を行い理解させることで習熟度が上がることを想定したものだ。

【大池自然の家CAI研修会】

宮原先生はハードを整え、中山先生の研究室から提供をうけて学習ソフトを整える一方、先生方の研修にも力を注がれました。1989年、更埴市主催による「大池自然の家CAI研修会」が始まりました。この研修会は筑波大学の中山先生、東原義訓先生との連携で、CAI教材の基礎となる教材研究、授業分析に重点を置きながら教材を実際に作成するものでした。その充実した研修内容が評判となって、全国から受講者が集まり、この研修会から長野県ばかりでなく各地でコンピュータ活用教育の中心として活躍する人材が育っていきました。その後、この研修会は、宮原先生を会長とするNETの会(長野県コンピュータ教育利用研究会)の協力によって1991年まで続き、さらに、現在は東原先生による信州大学公開講座に引き継がれています。

【CAIは時代遅れにならない】

指導要領の改訂でカリキュラムに総合的な学習の時間が設けられるようになり、また、小中学校がインターネットに繋がる時代になる中で、教育におけるコンピュータの活用も大きく広がっています。宮原先生はスタディシリーズのグループウェア「スタ

ディノット」を活用した実践を小学校で進める一方で、長く関わってこられたCAIが「古くさい」と考えられがちなことについて、つぎのように述べていらっしやいます。

インターネット以外はずべてだめと思われるくらいで「CAIは時代遅れ」と言われた。(中略)でも、私は、今までの経験から、教科での活用は、自ら学ぶ力をつけ、習熟度が上がり学力向上につながるののでずっと続けてきた。(前掲『紀要』から)

宮原先生は、長くCAIを実践してこられた経験からその成果として「確かに向上する習熟度・やる気」を前掲書に挙げていらっしやいます。たとえば、「成果」では、九九の学習で2の段や5の段を憶えることが精一杯と見られていたような児童を含めてクラス全員が「九九の博士」(コース名:九九クエスト)になったこと、学年末の到達度テストではCAIで学習したクラスの方がCAIを使わなかったクラスよりも平均点で8点も上回ったこと、単元終了時に行った市販テストでもCAIを続けてきたクラスでは平均点が90点以上となったことなど、例としてあげていらっしやいます。また、自分から学習活動を起こさないと前へ進むことができないCAI学習を続けることで、問題をしっかり読む、ノートを取りながらじっくり考えるという学習態度が自然に身に付き「やる気」を持って学習を進めることができるようになってきた、そして、そうした学習態度はCAI授業だけでなく普段の授業にも反映されるようになってきているとも述べていらっしやいます。

ここ2、3年、インターネット上で動くWEB教材と言われるものが出現して、CAIが再び注目を集め始めました。しかし、宮原先生は、インターネット上にある多くの教材サイトで公開されているものは、

単なる問題集にすぎず、本当のCAIではないとおっしゃっています。そして、平成14年度、埴生小学校ではスタディシリーズのWEB上で動く新世代CAIとも言える「インタラクティブスタディ」の授業実践を目指して5本の教材の作成に取りかかれました。そして、今年1月に開催された学習指導研究発表会では、そのうちの「5年生の三角形の面積シリーズ」の授業公開が行われました。宮原先生の「子どものために役に立つCAIは永遠に古くならない」という思いに新しい技術が再び追いついてきたといえるかもしれません。

【優れたリーダー】

校長先生の優れたリーダーシップがあって、初めて学校運営はうまく行くとされます。宮原先生は、そのことを充分自覚され「今、何をするのか」をはっきりと示すとともに、児童、そして先生方にとってよい環境作りのために、行政への働きかけにも常に努めていらっしやったことは言うまでもありません。

【番外 宮原先生の・・・】

宮原先生の・・・お宅はリンゴ農家です。先生のご家族が作られる無農薬リンゴのおいしさは、食べた人にしかわかりません。

宮原先生の・・・お宅には天然温泉があります。リンゴ畑の中に名湯で知られる上山田温泉の源泉の一つがあります。かつて、大池研修会のインストラクターの中には、H先生から宮原温泉に入る特権が与えられた人がいましたという噂がありました。

宮原先生の・・・撮影したビデオは、NHKテレビで放送されることがあります。先生はNHK長野ビデオクラブの会員として情報提供をしていらっしやいます。すごいカメラは伊達ではありません。

(ECONews)



いよいよ始まった インタラクティブ・スタディ教材による 授業実践

中山 和彦

インタラクティブ・スタディ教材による研究発表会が、11月15日に富山県滑川市立早月中学校、1月28日に長野県更埴市立埴生小学校、の二校で行なわれた。

これらは中学校・小学校でインタラクティブ・スタディ教材を使った日本で初めての研究発表会であり、その意義は非常に大きい。

早月中学校で使用した教材は、18年前にDOS版スタディライターで作られた「電流1」(作成/つくば市桜中学校)を、早月中学校の宮島和生先生がインタラクティブ版ライターで作り直したものである。埴生小学校の教材は、同校の堀越則夫先生が中心となり、CAI研究グループの先生方が自作した算数教材5本の中から、「三角形の面積」が研究会日に使用された。何

れの学校の教材も、それぞれの学校のホームページで試用できる。

インタラクティブ・スタディの特徴は、「何時でも」「どこでも」使用できることで、①クラスでスタディ ②一人でスタディ ③家庭でスタディ の3つの場面を想定している。①は、クラスルームCAIの時から伝統的な形式で、学校で、1学級全員が同時に同じものを学習する形式である。②は、学校内のいろいろな場所にあるコンピュータを自由に使って、自分で学習する形式である。③は、家庭へ帰ってから、インターネットを経由して、学校での学習の続きをしたり、あるいは出された宿題をするという形式である。もちろんPDAなどで情報のやりとりができ、モバイルがあれば駅での待ち時間などを使って学習することもできる。

2つの学校では、この3場面を想定しての研究発表が行なわれた。コンピュータ・ルームでのクラスの学習が終わった後、児童生徒は、学校内いろいろな所にある他のコンピュータの所へ行き、インターネットで学校のコンピュータに接続して、続きの学習を始める。よく見ると、子どもの使っているコンピュータには「誰々さんの家」と書かれた札がついている。実際に家に帰って

やっているのを見て貰うことが出来ないで、それぞれのコンピュータが誰々さんの家にあるものと仮定して使っているのである。学習がうまく進まない子どもには「先生を呼んで聞いてみよう」という指示が出る。そこで「先生に連絡する」というボタンをクリックすると、先生のコンピュータにつながる。CU see meというソフトとゴルフボールより小さい位のTVカメラのついているコンピュータを使っている子どもには先生の姿が、こちらの姿も先生のコンピュータに写っている。そこで判らないことを先生に聞き、教えてもらうことができる。

地域単位ぐらいに「学習サポートセンター」を作って、教育学部の学生や退職した先生方にボランティアとして常駐してもらい、手伝ってもらい、子どもの指導にあたってもらえばどうであろうか。また「学習サポートセンター」から、家にいるボランティアにリンクをして指導してもらうこともできるであろう。

このように、インタラクティブ・スタディは、学校・家庭・地域を結んだ形で学習を進めていくことが可能であり、IT時代の先駆けをなすものであることが明確になった。(21世紀教育研究所所長)



インタラクティブ・スタディ 教材作成奮闘記

長野県更埴市立埴生小学校 堀越則夫

1. はじめに

平成14年度、本校では4つの研究グループを発足させた。その中の一つがインタラクティブ・スタディ研究部会であり、6名の教師で構成された。6名の教師とは、コースウェア作成経験者1名、CAI授業経験者3名、未経験者2名である。年間教育計画には1月28日(火)にCAI公開研究会と明記されている。その日をめざして研究をスタートしたわけであるが、計画と実際の研究の進行状況には大きな違いがあった。まず、4月当初メンバーで作成した研究計画書をご覧いただきたい。(表1)

2. コースウェアの設計基本方針

今までは、一つのコースウェアをメンバーで分担してつくっていたが、本校では教師用画面に表示される評価情報に関心を持ち、教室で行う授業の教材研究のあり方を見つめ直したいとのねらいから、それぞれが1つずつコースウェアを開発することにした。

【開発教材】

「ながさせんしミリマン！」

小学校2年生、算数「長さしらべ」、未経験者2名
「長方形と正方形の面積」

小学校4年生、算数「面積」、CAI授業経験者2名
「三角形と平行四辺形の面積」

小学校5年生、算数「面積」、作成経験者1名
「立体の体積」

小学校6年生、「立体」、CAI授業経験者1名

3. 学習者分析

今までコースウェアの作成をやったことがないメンバーがほとんどだったので、短いコースウェアにすること、コースウェアの基本的なフローチャート(図1)は同じにすることを決定し、それぞれが保障する成果と教育目標を決めた。そして、学習者の実態を探るための自作テストの実施と分析を行った。

4. コースウェアのデータ入力

教材の設計書ができたところから、データの入力を行った。しかし、ここで最初の壁にぶち当たることになる。せっかく教育目標や応答カテゴリーを決めてあっても、データの入力時にそれらを生かして開発することができなかった。原因は、CAIの授業をやったことがないメンバーがいたり、経験が

研究日	研究項目
4/30(火)	コースウェアの基本方針
5/13(月)	開発の基本方針及びコースウェアの決定
5/20(月)	学習者分析
5/27(月)	事前テストの実施と分析, 教育目標, 誤答分析, コースウェアの展開
6/10(月)	
6/17(月)	
7/1(月)	教材データの入力 入力, 動作チェック, 修正
7/22(月)	
7/29(月)	
8/19(月)	
8/20(火)	
8/26(月)	
9/2(月)	実践Ⅰ 該当学年(学級)で, 作成したコースウェアを使って学習する。
9/9(月)	
9/17(火)	
9/24(火)	
10/15(火)	修正Ⅰ 実践Ⅰを通して, コースウェアに修正を加える。
10/21(月)	
10/28(月)	
11/5(火)	
11/11(月)	
11/18(月)	
11/25(月)	実践Ⅱ 該当学年(学級)で, 修正したコースウェアを使って学習する。
12/2(月)	
12/9(月)	
1/14(火)	
1/28(火)	研究発表会

表1 研究計画書

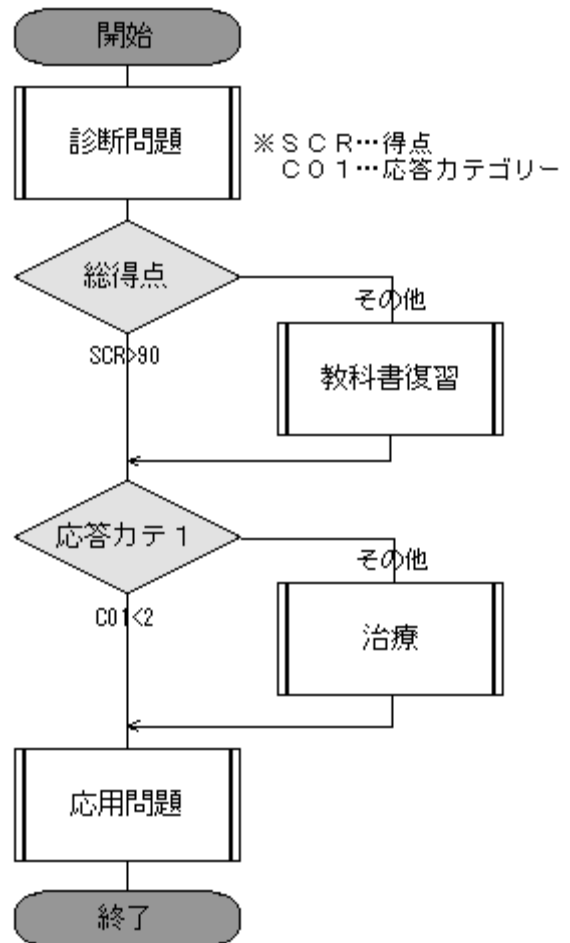


図1 コースウェアの基本的なフローチャート

あっても教師用画面から得られる情報を意識していないか、教師の役割を正しく認識していなかったことにある。

そこで、宮原校長先生の指示で、教師用画面の見方とCAIでの教師の役割を職員研修で実施した後、既存のCAIコースウェアを使って、授業を正しくやってみることにした。何回か授業を繰り返すことで、教育目標と応答カテゴリーの大切さがわかり、コースウェアの作成に生かすことができた。

さて、コースウェアの作成経験がないというのは、いつまでにどういうことを済ませておかなければならないかという見通しが持てないことにもつながる。図1に示した計画では、8月いっぱいに入力を終了し、実際に児童に使わせながら修正をしていくようになっていたが、夏休みが終わっても分担の半分もできあがっていなかった。原因は研究日にしかも2時間程度しかやっていたことだった。これが2番目の壁である。11月13日、東原先生に来校していただき、教材作成設計書と作りかけのコースウェアについて一人ずつ指導していただいた。皆さんが予

想される通り教材作成設計書の「保証される成果」と「教育目標」で終了になり、コースウェアの画面を見ていただくことはなかった。

5. 設計変更・完成への努力

その後の東原先生的全職員を交えての講演会を聞き、グループ全体にあせりと緊張感、コースウェア開発に対する一人一人の責任が生まれ、公開研究会まで時間を忘れて作成することになった。

さて、その際5年生の「面積」について、東原先生の指導とメンバーの協議によって、次のような変更をすることになった。

- 三角形と平行四辺形の面積を求めるコースウェアだったが、三角形の求積のみにした。
- 学習内容の定着度と誤答傾向を診断する問題群と、典型的な誤答を治療する7つの問題群、そして応用問題群を別のコースウェアとして作成することにした。その結果、それぞれが10分程度の時間で利用でき、別々に利用することもできたり、学習の展開に応じて、自由につなげて利用できるようになった。

6. コースウェア作成者の感想

さて、このようにして1月28日の公開研究会を迎えたわけであるが、コースウェア作成に携わった先生の感想を紹介する。

○教材作成をする上で、診断問題をして、つまずきのある児童はどこがどのようにつまずいているのか、誤答傾向がより明確になった。どのようにコースウェアを作成していくとより分かりやすく、より児童のつまずきに対応することができるかを考えていくことができた。さらに細かい誤答傾向をつかみ、よりきめ細かいコースウェアを作成していく必要がある。また、ひとつのコースウェアを進めていく上で、その基礎となる学習内容につまずきのある子どもに対して、その治療問題などと連携させる方向で開発・検討を重ねていきたい。(教師A：30代男性)

○この研究チームに入ったとき、WebCAIに対して否定的だった。子どもが学習していく上で、本当に必要があるのかという疑問があったからだ。しかし、教材を作っていくに従い、子どもたちの間違えやすい問題傾向を調べたり、その傾向からどうしたら子どもたらが力をつけられるか考えたりする作業を通して、このWebCAIの意味が分かってきた気がする。教室では、問題が分からない子に対して適切な対応がなかなかできないが、WebCAIを使うと、分からない問題でつまずいている子にもこちらで予想した手順で指導できる。ただし、傾向分析が不十分だと適切な対応はしきれないという点はある。それでも、何も手を打たないよりも、自分で学習していく手助けになることは、子どもの基礎基本を定着させる上で重要と考えられる。教材作成は、非常に多くの時間を費やし大変だったが、自分の作った教材で少しでも子どもたちの理解を確かなものにすることができるのなら、とてもうれしく思う。(教師B：新卒男性)

○自分にはできるわけがないと思っていた教材作りですが、とりあえず完成して動いたときは感動しました。問題1つ作るにも、画面の構成、数値、発問の仕方、考えさせ方など、これほど考えたことはありません。適切な問題を作るには、子どもたちの考え方、誤答傾向の実態をより細かく分析し、教材研究していかななくてはならないことを実感させられました。初めてで、未熟なコースウェアですが、子どもたらが喜んでくれてうれしかったです。(教師C：40代女性)

○今までのパソコンを使った教科学習は、作られた教材を使ってやっていた。今回、この研究グループでは自分で教材を作成するというので、果たしてパソコン初心者の私にできるのだろうかという、とても不安な気持ちでスタートした。子どもにどんな力をつけさせたいのか考えながら問題作りに取り組む中で、その教材研究や問題分析の大切さ、また子どもにつまずきに応じた指導の必要性を改めて感じた。今、なんとか作り終わったが、私の中で確実に成長したことは、パソコンが以前よりも親しみやすい存在になったこと、そしてもっとパソコンを活用していきたいなあという気持ちになったことである。

(教師D：20代女性)

7. 終わりに

初めて作成したメンバーのうち4名の感想であるが、その中からはコースウェアの作成を通して、普段繰り返されている授業改善へつながらる点がいかに多かったかということが伝わってくる。コースウェアの作成は、普段の授業へもよい方向で影響を与えるということがわかってきた。

本校で今年度開発したコースウェアは、以下のアドレスにアクセスすると体験できる。

<http://hanyusho.city.koshoku.nagano.jp>

本校のインタラクティブ・スタディを用いた研究は来年度も続くことが決定した。

【インタラクティブ・スタディ教材「三角形の面積」】

○保証する学習成果

辺の長さ等が示された三角形の面積を求める問題で、自分の目標の達成度や誤答傾向を知ることができ、典型的な誤答パターンから抜け出すことができる。

○目標

- 目標1 高さが三角形の中にあって、底辺が下にくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。
- 目標2 高さが三角形の中にあって、底辺が斜めにくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。
- 目標3 底辺が下にくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。
- 目標4 底辺が斜めにくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。
- 目標5 高さが三角形の外にあって、底辺が下にくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。
- 目標6 高さが三角形の外にあって、底辺が斜めにくる三角形の面積を、底辺と高さを選択して求めることができる。

○応答カテゴリー

- 応答カテゴリー1 三角形の求積で÷2を忘れてしまう。
- 応答カテゴリー2 三角形の求積で、斜辺を高さと考えてしまう。
- 応答カテゴリー3 三角形の求積で、高さが底辺から離れている時、延長線の長さをたして底辺としてしまう。
- 応答カテゴリー4 三角形の求積で、高さが底辺から離れている時、外側にできた直角三角形の部分の面積を求めてしまう。
- 応答カテゴリー5 三角形の求積で、画面の水平方向を底辺と考えてしまう。

コンピュータで学校を変える！？ ～0からのスタート、そして研究発表校まで～

練馬区立田柄第二小学校教頭 日下部弘之

0からのスタート！！～人影のないコンピュータ室～

私の勤務する練馬区の小学校では、平成12年度より各学校に20台のコンピュータが設置された。それ以前には操作に堪能な先生の間で、教室にコンピュータを持ち込んで授業に活用したり、学校のホームページを作ったりする姿はみられた。しかし、活用といってもあくまでも個人のレベルであり、全体で取り組む学校はごく限られていた。

ちょうどこのような時期に着任したのが現任校である。設置されたばかりという状況もあり、コンピュータ室の利用度は低く、ほとんど人影のない日が続いていた。理由は明白である。ほとんどの先生が、コンピュータ操作になじみがなく、指導の仕方がわからないのである。そうでなくても3階の一番端の教室である。ますますコンピュータとの距離が大きくなっていったのである。

コンピュータは単なる道具である。しかし、こんなに高価な道具を眠らせておくのはもったいない。たかが道具ではあるが、使い方ひとつで学校を変える原動力になるはずだ。どうするか。まさに0からのスタートであった。

まずは行動！！～下手の考え休むに似たり～

日本の歴史上、第三の教育改革が終わろう？としているところである。今回の改革の目玉は、子どもを含めた保護者や地域社会など、学校外からの改革ととらえている。学校を週5日制にするので教育内容をどう変えていきますか。社会の変化に対応できる子どもをどう育ててくれますか。等々の外からの要請にそれぞれの学校がどのように対応するかが問われているのである。自分の勤務する学校が試されているというのが私の考えである。しかし、現場での取り組みには学校間での隔たりがあるのも事実である。さまざまな新しい取り組みを試みている学校、旧態依然のままという学校、いろいろな情報を集めようとしている学校、手探り状態の学校などである。

このような状況のもと、学校にコンピュータがやってきたのである。この道具をいかに使いこなすか、埃をかぶらせるのか、学校のリーダーたる管理職の腕を試される出来事である。そして、保護者や地域から寄せられる、コンピュータはどうなっているの？という声にも応えることにもなるのである。

「下手の考え休むに似たり」という諺がある。囲碁の世界で使う諺である。コンピュータが導入されたもの

どう活用するか分からない。いくら考えても分からない。考えているうちにコンピュータに埃がかぶる。とにかく、行動あるのみ。

コンピュータで学校を変える作戦の遂行開始！！

これだ！！～百聞は一見にしかず～

こんな時に出会ったのが、つくば市学校IT教育推進プログラムであった。以前からつくば市の研究はあちこちから耳にはいたが…。とにかく行ってみよう。先進校から学ぼう。少しでも取り入れられるものはないか…。

単独の学校での取り組みは数多く見てきた私であったが、全市で取り組む共同学習、他校との電子テレビ会議等々、ネットワークを駆使しての学習には驚きであった。そして、生き生きと学習に取り組む子供、自信に満ちた指導者たち。百聞は一見にしかずとはまさにこのことである。これだ！！

いざ、研究発表！！に向かって～猪突猛進～

研究発表校としての研究を進めることより、コンピュータに埃をかぶらせないために、現任校に着任してからというもの、自分なりに種まきをしたつもりである。それは、人を動かすということである。

まず、全体的に若い先生ほどコンピュータに関心が高い傾向があることに目を付け、本校の若い先生を中心に、機会を見つけてはコンピュータソリューションフェアや研究発表などに参加を呼びかけてみた。その結果、5、6名ではあるが、最先端の情報通信技術にじかに触れ、その良さを実感した先生が増えたことが成果であった。

次は、コンピュータや周辺機器の職員室への導入である。すぐさま、2台のデスクトップパソコンを購入し、さらにMOドライブやCD-RWドライブ、スキャナやプリンタ等々の周辺機器を揃え、環境を整えていった。むしろアプリケーションしかりである。コンピュータ室とのLANも組み、職員室で児童の作品が見られるようになる設定をした後には、職員室のコンピュータが一日中フル稼働という日も見られるようになった。コンピュータの前に座って作業する先生たちに声をかけることも多くなった。コンピュータを通して先生たちとのコミュニケーションも深まったように思える。

こうなったら、いよいよ操作方法の実習である。人間、できないよりできるほうがいいに決まっている。コンピュータしかりである。口では必要ない、あきらめた、手書きで十分、避けている、馴染めない、かじってみただけで難しいなどの理由で挫折している人が多い。でもほとんどの人は、本心はできるようになりたいのである。

私の一番目の目標は学校自前のホームページを作ることであった。実は、着任1年目にHPに必要な素材をかき集め、私的に作った学校のHPは完成していた。しかし、

これはあえて先生たちには見せなかったのである。それは、下手でもいい、全員の先生たちが力を合わせて創り上げることに意義があると考えていたからだ。夏季や冬季の休業日を利用し、コンピュータの研修会を積み重ね、今年度末には完成し、アップロードする予定である。

今でも時々コンピュータ室に足を運び、授業のお手伝いもしている。コンピュータの前に座る子供たちの顔は生き生きとしている。そんな子どもたちに触れたくて、ついつい邪魔をしてしまう。しかし、管理職が関心を持つことは、自然と先生たちにも伝わるのだろうか。少しずつではあるが、先生たちのコンピュータへの関心と操作技能、指導技術を高めたことが全校で研究発表の気運を高めたことは間違いない。

やるからには、次から次へと手を打つ。猪突猛進とはこのことだ。

困っていること～増やせコンピュータ～

まず第一にコンピュータの台数が少ないことである。本校は20学級もの中規模校。従って、1学級あたりのコンピュータ室の割当は週に1時間である。そのようなわけで、1人の児童がコンピュータに触れる機会が少ない。このような環境の中でコンピュータを最大限に活用することが大きな課題と考えている。コンピュータをどう増やしていこうか。そして、LANを構築する必要もあるかな。でも予算が足りない！のが現実である。悩みはつきない。

もう一つ。いよいよ学習の視界を学校外に向け始めている。つまり、他校との交流である。しかし、近隣の学校とさえ歩調が合わないのが現実。難しいものである。どこかによい方法はないだろうか。もう一つの悩みである。

最後に～一番小さな提案～

いよいよ来年度に研究発表である。0からスタートした学校である。何も目新しい提案はない。しかし、コンピュータを通して学校が変わったことを見てもらいたい。ちょっとしたきっかけでコンピュータに埃はかぶらずにすんだ。そんな些細なことではあるが、私の自慢できることである。

全国の皆さんに本校の精一杯やっている姿をお見せしたいと考えている。

◇練馬区率田柄第二小学校研究発表会◇

平成15年11月25日(火)

E-mail / info@tagara2-e.nerima-ky.ed.jp
(4月にホームページ開設予定)



校内研究会 子どもたちとともに先生も学ぶ

ECONews 郵送会員休止のお知らせ

これまで、ECONewsは、21世紀教育研究所のホームページへの掲載と、有料会員登録者への郵送配布の二通りで発行を続けてまいりましたが、平成15年度4月からの郵送会員の募集を行わないことに致しました。郵送会員としてご愛読いただいていた皆様、本当にありがとうございました。今後も、21世紀教育研究所のホームページでECONewsをご覧くださいませよう、お願い致します。

Web上で動くインタラクティブ・スタディの教材を使った授業実践がようやく緒に就きました。まだまだ、その利点を生かし切っているとは言い難いかもしれませんが、スタディノートが現場の先生方のさまざまな実践を通して飛躍的に発展してきたのと同様、インタラクティブ・スタディも先生方に数多くの挑戦をしていただくことで、その可能性が広がっていくと信じます。誰も経験したことのない新しい授業の形が見えてくると思います。

Educational Research Institute for the 21st Century

21世紀教育研究所

- address 〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-33-6
- TEL 029-850-3321
- FAX 029-850-3330
- e-mail econews@eri21.or.jp
- URL http://www.eri21.or.jp